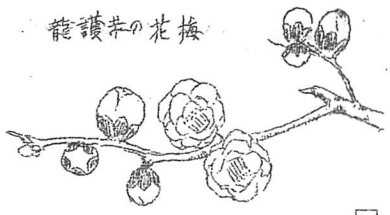

随想

梅をたずねて

羽柴　弘

今年は寒頭早々から雨が多く、かつてない暖かい冬であった。そして、立春を過ぎてもう数日の今日このごろ、朝夕はまだ冷たいが、さすがに日中は春めいて、遠山はうす紫にかすみ、霜に焼けて赤くなっている山麓のいろどりは　一年中で一番美しいときと私は感じている。

時まさに早春である。野山を歩くに最もよい時節である。草は枯れはてて、小道を歩いてもさえぎるものはなく、そしてもう、春の息吹きがきこえているようで、ヤブコウジの実が赤い。

（谷あいに入ると、さすがに空気はひんやりと肌に冷たく、やぶの向こうには梅が咲いている。

もうと分咲きといえようか。小枝の先の方には、まだつぼみが残っている。まだ若木で、幹が細くて、おもむきは少ない。しかし、枝ぶりがよく、花が白くて清楚（せいそ）、そのつぼみのがくの紅（べに）をさしたのとの対比が一きわ面白い。

街を歩いても、このごろは塀（へい）の陰がわ、植込みの向こうなどに、薄紅をさした梅が咲いているのを、よく見かける。それは紅梅と呼ぶものであろうか。だが、私はやはり梅は白いのが好きである。

冬ごもりの生活にあいて、近づいてくる春を待ちかねるように、梅を探るというか、春を尋ねるというか、気の合った一、二の友と村里に枝（つえ）を曳いて、一株、また一株とめぐり歩く、まことに楽しいものである。

長い年月をかさね、風雪に耐えてきた老樹は、まがりくねった太その幹がいい。半ば枯れ朽ちながらも、なお花を一ぱいつけている谷川のほとりの老梅、そこはかとなくあたりにただよう清香とともに、しばらくはその老樹をめぐって、とみこうみ、立ち去りかねるものである。

中国の詩人は「南枝北枝の梅、開落すでに異なり」と詠んでいるが、なるほど、一株の梅にも、開花に近い枝もあれば、まだつぼみの多い枝もある。面白いものである。

さらに次のような詩もある。

終日　春を尋ねて春を見ず
杖藜（じょうれい）階破る　幾重の雲
帰り来って試みに梅梢を見れば
春は枝頭に在って　すでに十分
（作者を知らず、うろ覚えで誤りなきを保しがたい。）

一日中、近づいてくる春を求めて歩きつかれたが、帰り来たって見ると、わが家の庭先の梅がほころびかけていて、春はもう来ていたのだ——という意であろう。メーテルリンクの「青い鳥」を連想する。

梅をたずねる——それはよろこびをもって春を待つこころである。

そんな思いをもって、私は、わが家のせまい庭先の、しだれ梅のつぼみが次第にふくらみ、そして次々と開くのを数えるようにしてながめ、朝毎にたのしんでいる。

本篇は昨年二月の作、カットは今日（一月二十三日）写したもの。この梅八重咲きで実がならない。常福寺、大内、長願と梅はかぞりあって、今三分咲きである。

計画

研修行事—今年の夢——

（年間の行事を計画的にと考え、次のようなことを、役員会に提案審議する）

黒沢ダムを訪ねる、（東光庵の桜も観よう、富士神社にも参拝しよう。烟雲亭と青山の方々の交歓会もかねて。

鶴見崎、沖ノ黒島、仙崎、船で日豊海岸をめぐるのもよい、

米水津村の小浦—休野浦—浦代をしらべる。

登りたい山　米花山、場黒山。秋芳の麓から彦岳に登るコースを開く。

秋の二泊三日バスの旅　十一月二十二、三、四日

第一日　小倉城　関門橋　下関赤間宮　笠崎付近　志賀島（金印出土地）

第二日　前原町　古墳発掘などの見学

第三日　太宰府　観世音寺付近（日田をまわって帰る）

昨秋十一月三、四日実施
国東半島バス旅行　会計報告

収入総計　二四七、〇〇〇円
支出総計　二四六、〇二〇円
差引残　九八〇円　以上前号仮会計迄

其後の支払
カラー写真代　六三枚分　三、一五〇円
白黒写真代　四三枚分　八六〇円
8ミリフイルム、現像料共　六、〇〇〇円
計　一〇、〇一〇円

右差引不足額　九、〇三〇円ということになりますが、前例もありまして一般会計から全額会員研修会費として支払いました。

写真、特にカラーフイルム（8ミリ映画）にとって下さった鞠丸氏に謝意を表します。

（以上会計担当　羽柴　弘）